

いものと、今あってその頃無かったものを記すことは、
経済の変化の一系譜として、興味のあることである。

○当時はあって今ないもの

京橋のたもと西側に讀賣新聞社があった。銀座の表通りは、新聞社が幾つもあった時期があった。次第に裏に移って、明治十年（一八七七）に草分けとして進出した讀賣一社だけが残っていた。同社はサービスの一つとして、春秋の大角力すまうの取組速報を、社壁にしつらえた力士の大きな板札で、国技館からの電話によって好角家を楽しませてくれた。

その頃あったものに、今は奇妙に思うが、郵便局が二つと、教会と旅館があった。銀座のひとつの名物となつたカフェーが、裏ではなくて表通りの銀座の新しい流行になり始めていた頃であった。

○当時はなかったもの

勸工場かんこうばが一つ残っていたが、百貨店は一つもなかった。勸工場の発祥は早くて、ある時期銀座の名物であったが、それは、相当広い店舗に設けられたいくつもの商店用ブース（仕切り）を、商店が借りて展示販売する集合店舗で、最後のものが新橋の傍に残っていた。

百貨店は、当時はなくて、大震災のあと、間口の広がった商店を引き継いで、まず松坂屋が大正十三年（一九二四）に開店、次々と銀座に進出した。百貨店の進出は

銀座の性格を大きく変えた。松坂屋が始めて下足預かりなしに踏み切って土足で出入りさせたことは、画期的なことであった。

百貨店と共に、銀座に大きな変化を与えたのは、銀行の銀座への大きな進出であった。大正十年の銀座八丁における銀行店舗数は七店であって、西側二つに対して東側五つであった。尾張町（銀座四丁目）の西南角には、八十四銀行本店があった。横町や裏通りに銀行があった記憶はない（八十四銀行は昭和二年の恐慌時に休業して昭和銀行への合併を経て安田銀行——後の富士銀行——に合併された）。

現在は、東側西側とも七店舗ずつの銀行があるが、店舗の間口の広さと立派なことで当時とは違うし、銀座の各横町に展開する沢山の銀行店舗を加えると、銀座の銀行は、都長銀・信託・地銀・相銀と大変な店舗数で、証券会社と保険会社を加えた金融界の銀座進出はまさに隔世の感がある。

百貨店と銀行は、夜は閉店して暗くなるし、専門小売店とは肌合いの違う存在なので、ひとつ頃銀座の軟かい雰囲気は大きく変わり、夜の衰退も招く一因にもなった。一つのブロックの両端に銀行の店が出来る、その丁目全体が衰微するとも言われた。近年、百貨店も銀行も、夜間の照明や店舗の構造について工夫するようにな

った。

銀座の生活風景

銀座八丁西東は、「銀ブラ」といわれて、貴顕たると庶民たるを問わず、歳末を除けば、おっとりとした楽しい散策の場であった。静かな散策を好む人は夜店のない西側を好んだものであった。

当時はまだほとんどの商家の奥には、主人家族と店員が住まっていた。横町と裏通りには、銀座八丁の大切な補助的役割をする酒屋・八百屋・魚屋・豆腐屋・氷屋・牛乳屋・理髪と髪結・銭湯などが軒を並べたし、各種職人稼業の家も沢山にあった。「しもたや」と呼ばれた住宅も相当混じっていた。新橋寄りには、新橋花柳界関係の多くの「やかた」が、陽気さを加えていた。

銀座八丁表裏を総まとめにしてみると、銀座は全体で、下町らしい大きな生活圏になっていたのである。その人達の子弟の学校が泰明小学校であったから、そこは庶民性の豊かな学校であった。今も続けてやっている私の卒業時の同級会は、バラエティに富んだ庶民の温かい集まりであって、銀行などへ入ってしまった人間は大きな例外である。

当時の銀座にとつて、もう一つ重要な存在は、京橋の川の両側に、通称「大根河岸」と呼ばれた東京青物市場があったことである。青物は主に舟で運ばれて、早晩から賑やかな取引が行われた。その若い衆こそは、銀座のいなせな気風の柱であつて、銭湯では入れ墨の威勢を添え、氏神の日枝神社の当時日本一といわれた大神輿みここしの担ぎ手でもあった。

その頃は銀座の表裏のどの家にも、まず風呂場はなかったから、横町の銭湯は、町の社交場であつた。つれてゆかれた子供達は、男湯と女湯の両親の間を遊んで回つたのであつた。

銀座の商店には、迷路といつてもよい狭い裏の路地があつた。ご用聞きや各種の出入りの人達は、店の表を使うことはなかった。威勢のいい魚屋が、朝夕この裏口から飛び込んでくる姿は、もう永久に見られない下町の派手な風物であつた。

青物市場と共に、併記しておかねばならぬものは、当時の魚市場が日本橋の川沿いであつて、両々相俟あひまつていたことである。大震災後、地元の反対を押し切つて、両市場が移転廃止されたことは、銀座の変化に計りしれぬ大きな要因となつた。

当時の銀座の商店の経営は、かなり前近代的なつましやかなものであつた。番頭格のものは通いであつた

が、小僧さんといわれたような若い従業員は住み込みで、台所に近い広間で、大きなおひつを前にして食事をした。月々の公休などはなく、盆と正月の戴入やまじりしか休みはなかった。夜は商家の書き入れ時で、十時頃まで店をあけているのが多かった。銀座のつましきの一例は、私の店などでも、夜になると、年寄りの会計が、銀行券に丸型の火のしをかけて、皺しわをのばしてきちんと整理して、翌日のお客様に備えたものであった。

交通機関と道路

銀座の交通は、注目すべき幾変遷をしている。

明治五年（一八七二）に新橋・浅草間に乗合馬車が生まれ、明治十五年（一八八二）にそれが鉄道馬車になり、明治三十六年（一九〇三）に電車になって、銀座を馬糞から開放した。翌年に土橋・お茶の水間の外濠線の電車が開業して、銀座の外延が広がった。銀座に青バスが通ったのは、大正八年（一九一九）であった。この一連の進歩こそ、昭和九年（一九三四）以降の地下鉄の開通などとは、比較にならない大変革であった。

銀座にとって、いま一つの大きな変化は、大正三年（一九一四）の東京駅開業である。それまでは鉄道の起

点が新橋駅であったから、銀座八丁は南の新橋に向いていたが、東京駅ができて、東海道時代の日本橋向きに戻ると共に、数寄屋橋向きにもなった。銀座はどう変わるのだろうかとう話していた銀座の人達の声が、耳に残っている。

私は、明治天皇崩御の頃の銀座のことを、かすかに記憶しているが、大正四年（一九一五）十二月、大正天皇が、即位ご大札奉祝で上野への道筋、銀座八丁を無蓋馬車で通られた情景を、目にみるように覚えている。つくづく良き時代の銀座であったと回想される。

銀座八丁は、社会の変転に無関係ではなかった。内閣打倒その他、特に大正七年（一九一八）の米騒動では、商店や交番が焼き打ちを蒙こうむった。

銀座八丁の名物柳並木も幾変遷があった。大正十年（一九二一）にも銀杏いちょうに変えられ、昭和七年（一九三二）に柳に戻っている。私は、柳の時代に育ったが、その頃は、銀座の商家の負担で、柳の下には美しい花壇が色を添えていた。そして、並木と共に忘れ難いのは、並木の下には、商店の運搬用荷車（人力による）が、荷箱に屋号や広告を入れて置かれていたことであった。当時、自動車運搬に始めて使いだしたのが明治屋であった。一番という番号の自動車が噂になった。

銀座の道路は、電車が通って敷石が敷かれて、馬から開放されたときが近代化の第一歩であったが、その後も

人道の舗装と共に幾変遷している。アスファルトをしみこました木製の煉瓦型のを敷きつめたことが、大震災の火勢を激しくしたことも忘れ難い。

銀座の交通が、銀座の外側をとりまく川の水運に当時まだ大きく助けられていたことは、大根河岸の青物が、近在からの荷車を別にすると、主に舟で運ばれていたのでも判る。川の水も、たまには若い衆が泳いでいるのを見かけたし、月島がまだ小学校の水練場だったことで、水の程度が知られるであろう。

銀座の道路で忘れ難いのは、夜店のことである。銀座とは切っても切れない存在であったが、夜店について、書かれたものも多いので、一、二の点のみを記したい。

銀座といえは夜店を思い出すほど、銀座と夜店は切っても切れないものであった。銀座には季節の市という臨時の夜店もあった。これらは、夜店が通常は出ない西側に並んだものであった。その一番賑やかなのが歳の市で、暮の二十五日頃から大晦日の夜明けまで正月用品で賑わった。

夜店といえは東側で、尾張町界限が中心であって、新橋や京橋の両端になると、出店もまばらだった。明治も早い頃は、夜店の商人から立派な表通りの商人が出たくらいで、随分色々な商品が並べられていたが、銀座らし

い夜店の一つの中心は、かなりの骨董品を含んだ古道具屋、古着屋、古本屋と植木屋であって、商店とは競合していなかった。

この夜店の外に、その頃東京を賑わしたものに縁日と寄席があったが、銀座では裏と外側にあつて、銀座八丁の表の点景ではなかった。

あとがき

銀座については、沢山の記述があり、かつて銀座に縁の深かった文芸家の方々のすぐれた文章もある。しかし、経済を軸にした記述はすくないので、その穴を埋めたいと思つたが、今は廃業して跡もないとはいへ、家業に触れざるを得ない点が、大きな気おくれであった。この点は寛恕を頂きたい。記述の誤りや記憶違いも多かるう。識者や私の泰明小学校の同級生男女二〇余名の方々からも、ご親切なご訂正ご教示を頂きたい。

銀座の繁栄を祈り、当時、東側の商店に映えた夕陽の美しさと、夜店のアセチレン灯の鼻を突く臭いを追憶したい。